

37. 脳卒中ってどんな病気か知っていますか？

脳卒中は、脳の血管が詰まったり、破れて出血したりして、脳の神経細胞が死んでいく病気です。体の半身が麻痺して動かなくなったり、ろれつが回らなくなったり、急に意識がなくなって倒れたりする病気です。

脳卒中はかつて日本人の死亡原因の1位でしたが、最近では癌が1位で、2番目に多いのが心臓病で、脳卒中は第3位です。寝たきりになる原因としては第1位であり、脳卒中は主要な病気です。

脳卒中は脳の血管の病気で、大きく分けると脳血管が詰まる脳梗塞と、脳の血管が破れる脳出血の2つがあります。以前は脳出血が多かったのですが、最近では脳出血が減少し、脳梗塞が増えています。塩分の摂り方が少なくなったことと高血圧の薬の進歩によって、ひどい高血圧をそのまま放っておく人が少なくなってきたためと考えられます。

脳の血管が詰まってしまう病気にもいくつかのタイプがあります。一つは比較的太い血管の壁にコレステロールが溜まり、アテロームと呼ばれる粥腫が出来てくることがあります。血管の内面が脆く傷が出来やすいので、そこに血小板が付着し血栓が出来ます。血管は狭窄し、血液が流れなくなってしまいます。これが「血栓性梗塞」と呼ばれます。

脳の細い血管が詰まった時は、酸素欠乏で死滅する神経細胞が少なく、症状も軽くすみます。これを「ラクナ梗塞」と言います。小さなラクナ梗塞であっても、数が増えると物忘れがひどくなってきたりしますので、楽な状態と安心はできません。

心臓に出来た血の固まりである血栓が、血液の流れで脳まで運ばれて、脳の血管を塞いでしまうことがあります。心臓由来の脳塞栓症として、これを「心原性脳塞栓症」と言います。血液で運ばれてきた血栓が詰まって引き起こす脳塞栓症は、比較的広い範囲の神経細胞に酸素欠乏をもたらし、それを死滅させるので、重い症状となって現れることが多いのです。

脳の血管が詰まる場合でも、脳の血流が一時的に滞り、軽い脳梗塞の症状が現れるが、24時間以内に回復する時は「一過性脳虚血発作」と言います。一時的に半身の麻痺が起こったり、言葉が上手くしゃべられなくなったり、片方の目が見えなくなったり、めまいがしたりすることがあります。脳の血管に血液が再び流れ出すので、症状は24時間以内に無くなります。しかし、一過性脳虚血発作は重大な脳梗塞の前触れであることも多いので、病気の進行を抑えるようにとの信号と言えるでしょう。

脳出血は色々な場所で発生するおそれがあります。脳の中の細い血管が破れて出血する脳内出血や、脳を包んでいる脳膜の血管が破れて出血する場合などがあります。

一般に脳内出血のことを脳出血と呼んでいます。出血部位の神経細胞は死んでいきます。脳の中に血の固まりが出来て、周囲の神経細胞を圧迫します。血流を通して酸素を受け取っていた神経細胞は酸素不足となり、死んで行きます。高血圧や、老化や、栄養不足で血管壁が弱くなってきて、ついに破れてしまいます。頭痛、めまい、半身麻痺、意識障害が起こってきます。

脳は3層の膜に包まれています。内側から軟膜、くも膜、硬膜と呼ばれる3層の膜があります。突然発病し、急死の原因として多いのが「くも膜下出血」です。若い人から見られ、高齢となるとさらに発病者が増加してきます。軟膜とくも膜の間に小さな動脈瘤が出来ることもあり、その動脈瘤が破れると、出血した血液は、膜と膜の間隙に広がり、脳全体を圧迫します。突然、激しい頭痛で始まり、嘔吐、痙攣などを起こし、意識が無くなり、急死することがあります。速やかに脳外科に入院して治療を受ける必要があります。

高齢者では、軽微な外傷で「慢性硬膜下血腫」が起こることがあります。くも膜から硬膜へ橋渡しをしている静脈が切れて出血し、血腫をつくり、次第に脳を圧迫するようになります。

脳血管の検査法が進んで見つかった病気に「無症候性脳血管障害」があります。何の症状も無いのに、脳の画像検査で梗塞や出血の痕跡が見つかることがあります。

多発性脳梗塞、あるいは1回の脳梗塞や脳出血などで、認知症にかかる場合があります。これを「脳血管性認知症」と言います。